

## 北里柴三郎試論…東京帝国大学医学部での教育

福 田 眞 人

はじめに

- 一・熊本から東京への旅程
- 二・大学入学とその教育課程
- 三・大学でのエピソード
- 四・内務省衛生局就職へ

はじめに

医学者北里柴三郎（一八五二—一九三一）は幼少の時より自家から外へ出され、塾でさまざまな勉学を積んだ。（一）その北里の志望するところは軍人か政治家であった。家で父母が医者になることを勧めた時、「長袖（医者）と坊主は尊敬に値しない」と公言し、塾の時間を惜しんで武術の鍛練に励んでいたのである。

しかし、故郷を離れ熊本城下に出て、そこにあった古城ふるしろ医学所（後の熊本医学校、現在の熊本大学医学部）に参加するや、当時長崎医学校から契約満了で帰国するはずであったオランダ人医師マンスフェルト（Constant George van Mansveldt, 1832-1912, 満斯歇児篤）が来校し、その教えを親しく受けた。マンスフェルトは北里に将来有るを見出し、自らの宿舎に彼を一人呼び出して、オランダ語、ドイツ語のみならず地理学などの知識を授け、また軍人、政治家志望の彼の心内を見抜き、その翻意を促すべく、細菌の置かれた顕微鏡に北里を呼び寄せて、そのミクロの世界を遍く示して見せたのである。

当初、医学に魅力を感じなかった北里も、師の強い導きによって医学に深い興味と将来性を見出し、ついに医学者としての道を歩むことを決意するに至るのである。

マンスフェルトは、任期満了で熊本を去るにあたって、北里に、当地での限界を示し、東京に出て勉学を続けること、さらにはその向こう側にはヨーロッパというもっと広大にして奥深い学問の場があることを示唆していた。

まさにその言葉通り、北里は故郷熊本を後にして、東京に出て、そこで医学の研鑽を積むことになる。それは当時日本随一の東京医学校で教育を受けることであり、それが後の日本最初の大学となつた東京帝国大学医学部で教育を受けることであり、そこを卒業して国家に貢献する有為の士としてその身と運命を捧げることをも意味していた。

この小論では、東大での北里の受けた教育と彼の動きを探る。

### 一・熊本から東京への旅程

北里柴三郎は、肥後熊本の里で半年ほどの余暇を楽しんだ後、明治四年（一八七一）二月に熊本城下の「医学所及び病院」、通称古城医学所に入學した。いよいよ正式の医学の勉学の開始である。北里は昭和六年（一九三一）の死の直前まで医学に携わっていたわけであるから、実にこの勉学開始の時から六十年に亘つて医学と付き合つたことになる。

この古城医学所で、明治三年（一八七〇）長崎医学校から転任

してきたばかりのオランダ人教師マンスフェルトにその才覚を見出された北里であった。

北里は、すぐその語学の才能、とりわけオランダ語を認められ、マンスフェルトの授業の通訳を任された。その上、彼は北里を自分の宿舎に招いて世界の地理をも個人的に教授している。一方ならぬ恩義に与つたのである。確かに、北里はマンスフェルトに見込まれ発見された学生であった。同窓の学友の誰よりも、教師の信任を得たのである。その中には後に東大教授になる緒方正規も居たが、彼は北里より先に途中で東京に出て、東京医学校（後の東京大学医学部）に学んだのである。

そして何より医学の面白さを教えてくれたのはこのマンスフェルトだった。

マンスフェルトは、北里の志望が実は軍人か政治家であることを見抜き、残念に思つたのであろう、自宅で医学の面白さを説いても見せた。しかし、もっと効果的な方法で北里を説得するのである。それは顕微鏡の中で動植物の細胞を見せることで、これまでも北里が見たこともない世界を示して見せたのである。

北里は北里で、敏感に師の配慮を感じし、また顕微鏡の中に見出した微生物の世界に魅入られたのである。マンスフェルトは、明治七年（一八七四）医学校に四年奉職した後に熊本を去るにあたり、北里にこれから学問を続けるにはまず熊本を離れて東京に

出て学び、さらには西洋に留学して修学する必要があることを諄々と説いた。

マンズフェルトが、外国人教師の契約任期が切れて明治七年七月に熊本を去ると②、彼の助言に従って北里は新たな学習の場所を求めて東京に出ることを決心した。今日の我々が考えるよりも遙かに物理的距離の遠かった当時においては、自宅を去り、六十キロメートル離れた熊本に出るための道程が、阿蘇山を左に見つつ二十峠を越えて一日を要して徒歩で行われた。ましてや東京に出るには、まず船や徒歩や車馬を乗り継いで長崎に着いたのである。長崎に出て、そこから船に乗って上京した筈である。

なぜなら、当時東京に出るには、まだ馬か馬車が駕籠か、徒歩しか無かった。東京―横浜間に鉄道が開通したのが明治五年（一八七二）のことであり、さらに東海道本線が全通したのと、四国と九州に鉄道が開業したのが明治二十二年（一八八九）であるから、まだ北里は列車で東京に出ることはできなかった筈である。

しかし、ここでいくつかの北里の伝記で矛盾した記述が見られることを述べておこう。北里の生前に弟子の宮島幹之助によって編集され（当然生前の北里自身も草稿を読んだと考えられ）た『北里柴三郎伝』（昭和七年刊）は、詳述はしていないが長崎から海陸三百里（二二〇キロメートル）を船で上京したことになっており③、孫の北里一郎の『北里柴三郎の人と学説』における記

述では、小国北里村から大分まで八十キロ歩き、そこで乗船して大阪にまず出、そこでの就業の後に金子を持って上京したことになる。④すでに祖父と孫で一事に關しても記述が違うことから、にわかには上京のルートが断定できないことになる。しかし、前者の方が北里の生前の目を経ていることから、より信頼がおけそうである。つまり、熊本小国北里、熊本、長崎、船で東京という旅程である。

では、長崎と東京間での大坂（大阪）での途中下船はどうか。これは判断が難しい。北里はまっすぐ熊本から長崎を経て東京に出たのか、あるいは、一時大坂（大阪）に留まり、準備を整えて上京したのか、これは今後の研究を俟たなければならない。

さて、ともかくにも北里は明治七年九月に本郷竹町にいた郷党の先輩山田武甫（一八三一―一九三）の宅に到着し、そこにはしばらく逗留した。山田は、北里が熊本医学校在学時代に県の役人（小参事）として校務に係わり、すでにそこで北里の才能に注目していた一人であった。

北里の実家の経済状態はつまびらかではないが、北里が上京し、東京で勉学を続けるのを仕送りで支えることができなかったことだけは確かである。それは熊本小国を出立する際に両親から言い渡された通りである。そのために北里は得意の語学を活かして翻訳をしたりあるいは雑務をこなして収入を得、それを生活費、ま

た学費に充てていたのである。しかし、それだけでは不十分な場合は、山田の支援を得ていたのである。また親戚の一人から幾ばくかの支援を得て、それを学資とした可能性が高い。後に官吏として内務省衛生局に出仕したときに、かつての借金とも支援金受取とも知れない金子を自分の給金の中から返金していることからも、確かに学資は不足して、それゆえに金品の授受があったのである。その上どうやらその親戚とやらは、その学費貸借に關していちいち借入書を書かせていたようである（それは現存しないが）、東京大学を卒業の折りにお礼かたがたその大阪の親戚を訪ねると、御祝いとしてご馳走にあずかったが、その際お吸物に貨幣が一枚入れられていて金の大きさを説いた。さすがにそこに返済を促す真意を見た北里は快くはなかつたが、就職後には在学中の学費返還を続けてその恩に報いたと共に、やがてその借金を皆済したのである。<sup>(五)</sup> そもそも、上京の費用を誰がどのように出したのかも未だに詳らかではない。

## 二・大学入学とその教育課程

東京に出たのは、東京医学校（後の東京帝国大学医学部）でさらに医学の研修を積むためであった。

東京医学校は、元来安政五年（一八五八）に設立された江戸幕

府の「種痘館」、「種痘所」が、文久元年（一八六一）に「西洋医学所」、さらに「医学所」となり、明治維新後は、「医学所兼病院」と改称されたものだが、新たに国学、漢学、洋学の覇権争いが激化し、ついに「大学」の中の「大学東校」とされ、開成学校は「大学南校」となった。ここ大學東校では、ドイツ医学に準拠することが至上方針として遵守され、医学校に關する限り国学の干渉は排除されたと言つてよい。そしてついに、明治四年（一八七一）には「大学東校」は「東校」と改称され、文部省所管となり、医学専門の学校としての性格を濃厚にした。

この「東校」はさらに翌明治五年には「第一大学区医学校」と改称し、さらに明治七年五月七日に「東京医学校」と称されるに至つた。

北里が故郷を出たのは、まさにこの直後の明治七年七月のことであり、本郷竹町に入ったのはその年の九月の事であった。

北里が下谷和泉藤堂邸跡（現在の千代田区神田和泉町）の学校の寄宿舎に入るまでは、山田家の寄留していたが、これはこの当時の学生がよくやっていた書生としてではなかつたかと考えられる。又、借金したのは上京時ではなく、『北里柴三郎伝』の文からみると、学校の寮に入つてからとも考えられる。しかし、とにかく苦学であつたことだけは間違いない。

かくして北里は上京の後、一年四ヵ月後の明治八年十一月をもつて東京医学校の学生となった。入学試験は特別にある定められた日に志願者全員向けにあったというのではなく、五月雨式さみだれに行われ、順次体格試験が施されたようである。

たとえば前年には河本重次郎（後の東大医学部眼科初代教授、一八五九—一九三八）が、近視のために落第となったが、なぜか幸運なことに次の年、つまり北里と同じ年の明治八年には視力検査を含めた体格検査が行われず、合格となった。

この明治八年十一月に入学を許された同級生は百二十一人だった。東京医学校は、当時下谷和泉橋の藤堂邸跡にあり、そこで寄宿舎に入った。

この入学迄の経緯は、北里の同級生の福井県士族佐々木曠（安政五年一八五八年一月一日—昭和四年一九二九年二月二十五日）の日記に詳しい。それを川俣昭男の論文（26）から孫引きすると次のようになる。

明治八年の秋はこの入学準備と手続きに費やされたと考えてもよい。

九月二十二日 十二時迄東校行 入学願書納ム  
十一月二日 八時東校行 学術検査ヲ受ク 検査科目 日本外史、輿地史略 作文治験ヲ記シ以医薬請文題 十時相済  
十一月五日 雨 東校ヨリ体格検査ノ差紙来

十一月六日 晴 東校行 ミュルレル氏自ラ検 午後直ニホフマン氏胸郭ノ広狭気度ヲ検シ後 胸前后ニ打診

十一月十二日 晴雨 東校行 独乙文法 詞活音 筆算 フィンク氏 独ホルツ氏算一時過済

十一月十九日 晴 東校ヨリ差紙来 入校差許シニ相成候条 明

廿日證人同道參校アルヘシト

十一月廿日 晴 東校行監事局へ行 證書ヲ出シ六番舎四番室部屋ヲ取

十一月廿一日 晴 東京医学校六番舎四番室入荷 物皆二人力車

ニ載運ブ

十一月廿四日 曇 火曜日 初メテ六番教場ニ於テ ホルツ氏ヨ

リ 新入六番舎生百十七名ノ受業

この一連の試験、体格検査から、お雇い外国人（ドイツ人ミュルレル、ホフマンなど）が自ら行い、そこには胸の検査、とりわけ結核を検査する意図をもつて胸郭検査、打診診察が行われている。

北里も恐らく同じような経緯で入学を許され、荷物を寄宿舎の六番舎へ運び込んだのであろう。（宿舍費用、現在不明。部屋の構造、図面など、図一参照。）

入学後、早くも二十二日にはもう最初の授業が行われ、ドイツ

人教師ホルツからドイツ語、地理学、数学のいずれかを学んでいる。

当時の医学校の教授陣容は以下の通りであった。(表一参照)

すでに述べたように、東京医学校とは、安政五年(一八五八)に創立された種痘館を発祥とし、その後、種痘所、西洋医学所、医学校兼病院、大学東校、東校、第一大学医学校など名称の変更を重ねたが、北里入学の前年の明治七年に東京医学校と改称し、いづれにせよ後の東京帝国大学医学部の前身であった。

校長は長與専齋(一八三八—一九〇二)で、本科はドイツ人教師が主に授業を担当していた。その中にはウイルヘルム・デーニッツらがあり、後にはシュルツェ、マイヨット等が加わり、彼らら定めたカリキュラムに従ってドイツ語で授業が行われていた。(表一参照)

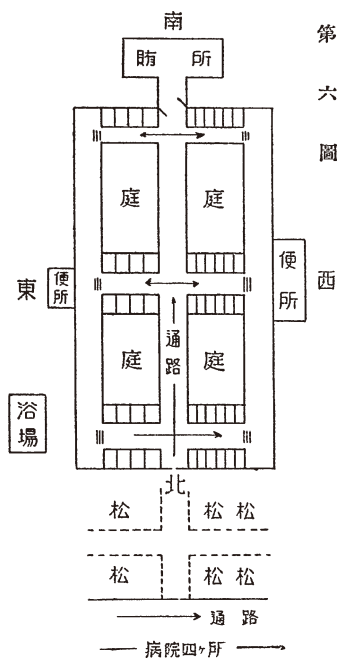
お雇い外国人が幅を利かせていた時代であり、かつ授業から論文まで担当教師によって英語であったり、ドイツ語であったりした。かえって今日声高に国際化が叫ばれている時よりもはるかに国際化が進んでいた時代なのである。たとえば当時、工学部では英語やドイツ語で授業が行われ、美しい筆記体で書かれた英文論文を見ると、一種特別な感慨に囚われる。それがとても維新直後

表1：明治10年時点の東京大学医学部教員

名前	国籍	専門	任期	給与
デーニッツ	独	解剖学	明7	350円
ヒルゲンドルフ	独	博物/数学	明7	(225円)
コッヒウス	独	理化学	明7	
フンク	独	独語/羅語	明7	280円
ウエルニツヒ	独	内科学	明7	400円
シュルツェ	独	外科学	明7	500円
ランゲ	独	独語/羅語	明7	250円
ニーヴェルト	独	薬学	明7	270円
ホルツ	奥	独/地理/数学	明7	120円
ランガルト	独	薬学/化学	明8	350円
シェンデル	独	数学/物理学	明8	280円
アールブルク	独	動植物/博物学	明9	(250円)
ベルツ	独	内科学/産婦人	明9	400円
マイヨット	独	独語/羅語	明9	250円

『文部省第六年報』(明治11年発行)

図1 寄宿舍の略図



の日本人が書いたものとは思えないほどの美文であり、また美しい筆致なのである。

しかし、事医学部に關しては、どうやら構内での会話はすべてドイツ語でおこなわれていた模様で、そこでの盟約とは次のようなものであった。

盟約乃原素（作成佐々木曠）

凡国乃事業学修ト実地トニ成ルモノニシテ甲乙必ス平均セザルベカラズ然リ而シテ乙ハ語学等ノ学課ニ於テハ最モ緊要ナルモノニシテ小児ノ語ヲ習フ以テ知ルヘシ而シテ我輩日獨乙學ヲ従事シ茲ニ一年余其ノ受クル処ハ皆文法熟字作文等ニシテ多クハ実施ニ就クヲ得ザリシニ幸ニ本日同志ノ結社アリテ通常ノ交際ニ於テ互ニ獨乙語ノミヲ以会話スベシ（八）

明治十年（一八七八）、東京医学校は東京開成学校と合併して東京大学となり、医学校はその中の医学部としてあらたに出発することになった。その総理に池田謙齋（一八四一—一九一八）が着任し、長與専齋は副総理となった。その直前の明治九年十二月には、本郷加賀藩屋敷跡に新校舎が竣工し、すでに移転を終了していたのである。その概要とは以下のようなものである。

「明治八年五月七日付で前田家の当主利嗣が東京医学校への土地献上を東京府に願ひ出て八月五日に文部省から東京医学校に引き渡された五四二・七一坪もその一つで、これは同家と東京医学校が接する所に、前田家の突出地があつて医学校寄宿舎の設計上支障があるため、医学校が交換を願ひ出たところ、前田家の篤志によつて寄付をうけることになったもの。」

「工事経過に關する記録はほとんど残されていないが、地均しほかの土木工事は八年七月に始められた。建物については、寄宿舎が同年末に着工されて翌九年三月中に竣工をみていること、先述の工事請負人の決定の日付と医学校、病院の下谷からの移転の時期（明治九年十一月二七〜三〇日）が極めて近いことなどを考えると、個々の建物の工期はかなり短かつたものと思われる。」（九）

北里柴三郎の学生時代の生活は必ずしも明確に分かつていない。

北里の同期で、後に東大医学部教授となった河本重次郎の思い出の記『回顧録』を繙くと、北里柴三郎が辿つたかもしれない道筋が淡々と綴られていて参考になる。以下、河本に就いて、北里の学生時代を再構築してみよう。

河本は安政六年八月十五日兵庫県但馬に生まれる。吉村寅太郎

に連れられ、明治三年に銀山越え、播州五條を通り過ぎ、明石を経て、舞子から兵庫に至り、そこで蒸気船に乗り込んで、品川湾に停泊、高輪に上陸、その後横浜まで出た。

横浜で太政官に属する金銀吹分所長をしていた叔父の中江種三を頼り、横浜高島町にあった高島嘉衛門の塾で学習したのである。またその後、東京外語学校でドイツ語を学習した。

河本は入学のために藤堂屋敷にあった東校に行つて、体格試験を受けた。ミュルレル (Benjamin Carl Leopold Muller; 1824-1893) やホフマン (Theodor Eduard Hoffmann; 1837-?) の両外国人教師がいて、また医科大学初代学長三宅秀ひたひ (一八四八—一九三八) もいたそうだ。この時は、河本は近眼が十二度とかで、入学の許可が出なかつたが、次の年には体格試験なしでどうにか入れた。ランゲ教師が試験を為し、無事入学した。

余が入学した頃は、寄宿舎に生活したが、其寄宿舎は今では全く影なく、知る人としてないが、今大学の外来診療所の在つた所に、長く三列に木造二階作の粗末なる大建築が南北に面して前後に並び立て居て、その長い廊下が中央を結び付けて居た。而して、其突き当たりの一番奥の所に賄所があつた、寄宿舎の左右の端にも、廊下はあつたが、之れは床なしで砂敷で

飛石が並べてあつた。寄宿舎は、二階も下も、各室皆通り道の左右に並んで居たが為め、南の室は好きも、北側の室は日がささず、冬は寒く困つた、室の左右には、壁に接して高き床あり、畳二丈を前後長なりに敷きたるものなれば、室内に都合四人入る、ことが出来た。下の畳座敷には、机を置き勉学に使ひ、夜は上の高床に入りて寝るのであつた。併しこゝに一つ危険があつた、それは「ランプ」であつた、夜分床に入る時、「ランプ」を枕の横に置き書を読む風が、一般に行われ居りたるを以て、場合に依ては此「ランプ」が転倒せぬとも限らん、或る夜、余は二時頃便所に下りて見ると、或る窓から火焰が吹き出で居た、そこで、余は大声で、火事よ、と云つて大騒ぎ起りしも、後の祭で、遂に寄宿舎一棟の長屋を全部焼失した。(二〇)

このように寄宿舎は手狭で、しかも冬の間は寒く、危険も付き物だったが、意外と学生達はその生活を楽しみ、また生来の性質や素質の片鱗を覗かせていたのである。(この宿舎の概念図を見よ。図一参照。河本書の七〇頁より引用。)

ではたとえば河本が『回顧録』の中で次のように書いている北里の存在感を、どのように解釈すればよいのだろうか。

吾が級には真鍋と云ふ人が(中村弥六君の弟)居た。此の人



は酒を呑むと、非常に狂気になる癖あり、或る時酔って帰るや「ランプ」を室内に投げ込むと云ふ仕末で、其危険と云ふたら、大変であつた。かう云ふ時には、毎に北里君が云つてをさめ役を為したものであつた、又、急に何にか相談会でもあると、北里柴三郎君が議長と云ふ風で、今日、同君が有名となりし一つは、此議事的、事務的才を持たれたからであると思ふ、其時分「不肖柴三郎」と云ふ様な語調で、議されたものであつた、兎に角、同君は吾々よりも四五歳うえて、先づ先輩の格であつた。併し能く出来たと云ふのではない、学校の成績は中等位であつた。(一一)

年長者であつたということはさておき、北里は事有るごとに出かけいき、その場の問題を解決する能力と胆力をどうやら備えていたらしいことは分かる。しかし、河本の目にも北里が優れて学力で他人を凌いでいたと言う認識を得られなかつたようである。

東京大学医学部での授業は、年度毎に変化した。それは以下の表二のようなものであつた。

### 三・大学でのエピソード

北里は、この東京医学校、東京大学医学部の両方の時代を通じて、単に勉学に精を出したのみならず、その他の活動にもおおいに気炎を吐いた。

ここでは三つほどそのエピソードを上げれば、その姿が十分に窺えるであろう。

そのひとつは、乱暴な生活態度である。破衣弊帽というその後の旧制高等学校生のバンカラ（その語源は「蛮カラ」、「野蛮なカラ」ということで、ハイカラ High collar をもじつて対応させたものであつた）もうこの頃からその風を競うようになり、またドイツ語のゲル（金、Geld）やメーチエン（娘、Mädchen）という隠語が学生の間にあつたやも知れない。その先駆的ともいふべきバンカラが寮生活にはあつたらしい。窓から商人を呼んで買ひ食いをしたりして、その代金を払わずにごまかすといったようなことである。

二番目は、同盟社と称する結社活動である。どうやら昔からの武士（軍人）志向、政治か志向がまたぞろ顔を出したのか、北里は雄弁をもつて旨とし、毎週土曜日は演説会で、その政治的傾向は、おおいに学内でも脅威として認識されたが、活動はそれに留

表2 医学部教科内容と在籍者数

		冬学期	夏学期	在籍者数
東京医学校 明治7年5月	明治7年入学			121名
	明治8年 予科3等生	ドイツ学 算術 地理学 幾何学	ドイツ学 算術 博物学 地理学 幾何学	121名
	明治9年 予科2等生	ドイツ学 ラテン学 博物学 代数/幾何学	ドイツ学 ラテン学 博物学 代数/幾何学	67名
東京大学 医学部 明治10年4月	明治10年 予科1等生	ドイツ学 ラテン学 動植物学 鉱物学 代数学	ドイツ学 ラテン学 動植物学 鉱物学 代数/幾何学	48名
	明治11年 本科5等生	物理学 化学 医家動物学 解剖学	物理学 化学 医家植物学 各部解剖 組織学	31名
	明治12年 本科4等生	物理学 化学 実地解剖	物理学 化学 顕微鏡用法 生理学	31名
	明治13年 本科3等生	外科総論 内科総論 生理学 生理学実地演習	外科総論 薬物学 毒物学 内科総論/病理解剖 製剤学 分析学実地演習	31名
	明治14年 本科2等生	外科各論 病理各論 外科臨床講議 内科臨床講議	外科各論 病理各論 外科臨床講議 内科臨床講議	31名
	明治15年 本科1等生	外科各論 眼科学 病理各論 外科臨床講議 内科臨床講議	外科各論 眼科学 病理各論 外科臨床講議 外科手術実地演習 内科臨床講議	30名
	明治16年 卒業	卒業試験 2-6月	学位授与式 10月27日	26名

『文部省年報』明治8年-17年  
川俣昭男論文参照

まらず、講義録の印刷販売から、新聞印刷事業、撃剣や柔道のスポーツ大会、ストライキの指導まで幅広く、そこで指導的立場を取っていたらしい。この結社の長が北里であり、その統率力と面御見のよさが、その後の北里を彷彿とさせる。おそらく北里は、どこにいてもどのような事件にあってもその渦中であって、平然と事務を執り、仲間を叱咤激励し、ついにその行動を成功に導くというほどの人物であったのである。

北里はすでに故郷を出る時、母から「出世するまで故郷に帰るな」との厳命を受けていた。それは厳しい枷だったが、また母の思いが籠った言いつけでもあった。

北里は、若い頃からいつも学問のために故郷の父母の膝下を離れていた。その心情はどのようなものであったのか、以下の手紙に如実に現れている。

小生此ノ年齢迄モ遠ク膝下ヲ離レテ御両親様ニ御不自由ヲカケ誠ニ以テ心痛致シ候得共、是此ノ心痛ハ決シテ御両親様ノ御本意ニ非ズ。一旦学問致ス様御救シノ上ハ他事ヲ顧ミズ此学ニ勉勵シ、他日卒業ノ上ニ国家ニ裨益シ以テ御両親様ヲ顕ハスガ小生ノ志ス所、且又御両親様ノ御思召モ其所ニ候ヘバ、小生ハ今ヨリ向フ四ヶ年ニシテ始メテ卒業致ス事ニ候ヘバ、其迄ハ御

膝下ニ待ヘルコトモ出来不申候間、其迄ノ所ハ君等小生之分ノ朝夕之孝仕モ大ニ勉勵シテ御両親様ノ御意ヲ慰メ奉リ、決シテ御意ニ逆フコトナク御孝養被成下度伏而頼人候。小生卒業之後ハ君等二代リテ君等ニ大ニ勉学為致、小生御膝下ニ傍フテ御孝養致候間其迄之所ハ無怠御仕ヘ可被成候(二三)

東京大学在学中、北里は牛乳会社に職を得て、その収入で自活していたのみならず、肥後から呼び寄せた弟北里<sup>さか</sup><sup>お</sup>（慶応三年一八六七年四月三十日―昭和七年一九三二年六月六日）の学資も自分のアルバイトで面倒見ていたのである。今日風に牛乳会社でアルバイトというと、あたかも早朝の配達でもしていたように聞こえるが、実際には東大の医学部の学生ということもあって、本当は、衛生担当であったのではないだろうか。あるいは、その語学力を見込んで、牛乳会社が仕入れた当時最先端の牛乳の殺菌、あるいは設備保持の方法を、たとえばオランダ語やドイツ語の原書から読み解き、会社員に教示していたのではなかったか？あるいは、牛乳の品質管理というような重要な仕事を任されていたのかも知れない。後に北里が、実験用動物を部下に管理させ、そこで様々な生体実験やワクチンを創成したことを考えると、すでにこの時の経験がその後活かされたのかも知れなかった。

その時の乳牛はどのようなものが使われていたのか、あるいは

それはホルシユタイン種だったのか。まだまだ研究の余地はある。

なにしろその牛乳会社社長の兄である後の日銀総裁、男爵、當時は大蔵省官吏、松尾臣善（一八四三—一九一六）の次女席と、東大卒業後の明治十六年四月に婚姻を結んだのであるから、信用の度合いが違ったと言ふべきであろう。北里は苦学したと書いたが、その通りであった。このアルバイトともよぶべき収入の道は、今日のハンバーガー屋やチェーン店の居酒屋でバイトをするのとは違って、全国で唯一の大学の学士様が、それも将来は日本を背負って立つ医者卵がバイトをする訳だから、おのずと待遇も違つただろうし、それで生活を支えることができるほどの収入があったものと察せられる。

苦学について北里は、実弟袈婆男を熊本から呼び寄せ、東京帝国大学法学部に入学させてその卒業まで面倒見ていたが、この弟袈婆男もやがて松尾臣美善の四女千代を明治二十五年十一月に娶ることになるので、松尾家における北里家の信頼たるや絶大なものがあつたことが察せられる。

まだ北里柴三郎が東京にあり、弟妹が熊本にある時、北里が二人に送つた手紙は彼の心情をよく吐露して興味深い。以下に引いてみよう。

（手紙の引用、現代仮名遣いに改め、かつ句読点も打つてある）

いやしくも男子に生るる以上は、おおいに愛国の心を平生かねてより養成し、我が帝国をして世界万国と併立せしめ、彼我甲乙なく、我彼の上に出づるとも敢えて彼に一步を譲らざる様に我が国を不羈独立ならしむるは、今日に生育するお互い男子の志すところにして、一日も忘るべからざるものなり。しかれども人々一大業を成さんと欲せば、各々その基礎を堅固ならしむべし。その基礎とはすなわち一身上の勉強なり。如何に志あるも人に学力なければ他人これを信ぜず。他人に信を失うとはなかなかもつて一人にて国家に大益を起さんと欲しても、決して思ふばかりにてなすこと能わず。天下の事は衆と共になすに如かず。よつて衆人の中にて大志あるものがその誘導者となりてこれを勧誘するものなれば、その人必ず大学力なければ能わず。その大学力とはかねて幼少の時に大勉強に根す。よりて今日青年の時は寸時も怠らざりますます勉励に勉強を加え他日大業を志すべし（二三）

ここに明治時代の典型的な立身出世の言辭をみる事ができる。ここには、将来を見据えて、大業を成そうという北里のおおなる自負と希望を見ることが出来る。それが、弟妹への書簡にあることが興味深い。

このようにいわば血をわけた他人に心構えを語ることで、彼自

身がまた自己を鼓舞していたことが想像される。志の大きさに押し潰されないだけの知力と体力をすでに北里は自覚し、かつ身につけていたのである。そこには、東京大学医学部の学生に於いてさえ、士族であるとか平民であることが明記されていたという事情があり、そこにさらに士族を学力、能力で追い抜いて自分の力の程を示そうと言う心のドライヴが働かなかったということはないだろう。文字通り負けん気の強い北里のことであるから、一層闘争心を燃やしたものと察せられる。

第三番目のエピソードは、ドイツ人お雇い外国人教師シュルツェ (Emil A.W. Schulze, 1844-1925) との確執である。

シュルツェは、外科学と眼科学を担当していたが、講義要録を学生に頒布した後、授業でまだ終わっていない単元を試験したりして問題になった時、学生全員で共同謀議し、授業でしていない部分はいつさい試験で答えないと申し合わせたのである。事の次第を知ったシュルツェは激怒し、あやうく辞任して帰国するところであったが、学長三宅秀と同じ外国人教師ベルツ (Erwin von Bälz, 1849-1905、後に皇太子侍医、また草津温泉の効能を称揚し、かつ湘南の地のサナトリウムに適することを指摘して、日本の結核療養地としての湘南を定着させた功績がある。高田畊安の茅ヶ崎南湖院はその具現であろう。) が慰めて、やっと事なきをえたと言う。

この話には続きがある。後にドイツの地でコッホの元で北里が修学している時、その研究会に参加していたシュルツェが、日本での経験を誇り高らかに述べ立てた時、その話の中の乱暴狼藉を働いた無礼の輩としての学生こそが自分であると名乗り出て、シュルツェを赤面させ、辟易とさせたことである。まだまだ東洋の地は遠く無縁の場所と思われていたので、恐らくはシュルツェの座興としての逸話の披露であったのだろうが、そこに思わぬ落とし穴があったという事であろう。

もうひとつ興味深い、これ以降の北里柴三郎と東大(帝大)との確執を生むことになる素地が学生時代にあったかも知れないことを見ておこう。それは、青山胤通(たねと)(一八五九—一九一七)との確執である。そのところを実に観察眼の鋭い、しかも何十年後に自分の回顧録に記している同級生仲間が一番で卒業し、後に東大医学部教授になった河本重次郎の言葉に耳を傾けてみよう。

上の級に古川栄君が居た(中略)其同級に青山君が居られた、其自分の気質は、後日の同君の気質と全く同じであった。或る時、青山君がスクリバに何にか問われて、答えが旨く行かないだ、所が上の方で見て居た余が級の北里君が、何の気もなく少しく笑った、青山君は大に怒って、手に持って居た大腿骨の頑

頭で、振り向き乍ら、北里君の頭を打たんとしたことがあった。

(中略) 青山君は、体軀も偉大にして、精神気力、亦大なる所あり、衆人の及ばざる所であった、兎に角、一種の豪傑であったに相違ない、其一旦憤怒あるや、虎豹の如く、殆んど近くべからず、故に人に愛せらるゝと云ふよりは、寧ろ敬畏せられたる方なり。(二四)

ここで言う青山とはもちろん後に「帝大の青山か、青山の帝大か」と言われた青山胤通で、安政六年東京の生まれ、内科学の専門家で、医科大学学長を務め、後に男爵になっている。近代日本の内科学を確立したといわれるのは青山胤通、三浦謹之助、入沢達吉の三人だが、このうち、青山胤通は明治天皇の事実上の主治医とされていた。

青山は、北里の卒業の前年明治十五年(一八八二) 第四回卒業生として卒業し、その後ずっと帝大に奉職した。その後青山胤通は二十九歳で、外科の佐藤三吉は三十一歳という若さで教授に就任した。

青山の名前は、こうした医学界のみならず、医者として森鷗外から紹介された樋口一葉や石川啄木、齋藤緑雨を診たことでも知られている。彼等は皆結核で夭折した。

ここで問題なのは、やがてこれから三十一年を経た大正三年

(一九一三) に、青山の率いる東京帝大医学部が、ついに北里の伝染病研究所を内務省所管から文部省所管に移してその配下に置き、青山が所長に就任するところまでこの対立、怨恨関係は延々と続くことである。もちろんそこには青山対北里、文部省対内務省、東大対伝研という大きな構造があったことは間違いない。それはある意味で、一八九四年の香港におけるペスト菌発見騒動にその一大クライマックスを迎えることとなった対立の構図であった。(これは別項に譲る。)

#### 四・内務省衛生局就職へ

北里はあまり優秀ではなかった、それゆえに東大に残って教授になれなかった、という印象を強く持っている人が多い。それは正しいことだろうか？

それに対して、まず入学者数百二十一人、次年度で一気に約半分には減少し、本科開始時に三十一名、本科一等生で三十名、卒業試験合格卒業生数二十六人ということを確認して、その中で八番であったということを見れば、よく勉強していたと言わざるを得ない。(表二参照) 秀才の部類に属することは間違いない。学年トップでなければ、東大に残れないということだとしたら、それはそれで仕方のないことだ。

実際のところを見てみると、同級の中では一番の河本重次郎と四番の隈川宗雄が東大に残っている。人物、学業から残ったのであろうが、八番が駄目と言うことはないだろう。

川俣昭男氏（北里の東大医学部の同級生川俣四男也の孫）の論文によると、川俣は明治七年入学し、明治十五年十一月で前期末試験合格により、明治十六年一月に卒業試験の申請を行い、二月から六月にかけて、相当長期間をかけて卒業試験を受けたようである。

たとえば、外科や眼科の試問では、病床と論理試験の両方が課され、病床試験では「一週間患者を治療し、原因、診断、治療方法などを毎日記録させ」るなどしている。

ちなみに、「成績甲」は、一番河本重次郎と二番大谷周庵だけで、北里は残念ながら「成績乙」だった。今日風に言えば、成績は優良不可の四段階の第二番目「良」ということになる。

具体的な成績は以下のようなものである。（表三）

表三・明治十六年二月より七月までの医学学生卒業試験成績

北里柴三郎

腎内脈論（丙）、組織学（丙）、局処解剖（丙）、生理学（丙）、  
第一成績（丙）、外科病皮下論（乙）、外科論理（乙）、眼科（甲）、

第二成績（乙）、内科病症実験（丙）、内科論理（乙）、  
解剖学（乙）、第三成績（乙）  
全成績（乙）、点数（四〇）、順序（八）

つまり、北里柴三郎は卒業二十六名中、席次としては第八番目であった。

北里柴三郎は四月二十一日付けで卒業証書を授与され、同月内務省に勤務した。実際には内務省衛生局から明治十六年四月十三日付けの辞令が出されている。ここでは照査課に配属になり、主に外国の文献調査と翻訳を担当した。また、十月二十七日には正式の学位記が授与された。東京帝国大学全体で総勢六十七名。

しかし、成績や将来の進路を語るのにもう一点はるかに重要なことは、北里が最高学府に残りそこで業績を成すことにならぬ幻想を持っていなかったということであり、さらには内務省で、日本人が西洋から学んだ新領域としての衛生に人生を賭けてみようと考えていたことである。衛生という観念がまだ新しくあったこの時代において「衛生」という言葉が一種の流行語にさえなっていたのは興味深い、かかる認識に達したことは、それ自体おおいに先見の明があったということであろう。

つまり、有り体に言えば、北里は帝大になんの未練もなかったのもっと実務的かつ国民に役に立つ領域での貢献を目指していたの

である。この点でも北里は先見性があり、ユニークであった。別の言い方をすれば、たとえ北里が立身出世の権化であったとしても、その視野に国民的貢献という指標があったのである。

ちなみに、この年明治十六年十月二十七日に東京大学の学位が授与された。卒業生は全部で六十七名だった。その中には、文学部政治学及理財学科の坪内雄蔵、後の文豪坪内逍遙が、また哲学科には歴史家として名を成した三宅雄二郎（雪嶺）がいた。同じ医学部には、山根文策がいてその次女ミハ子は後に北里柴三郎次男善次郎の嫁となっている。大正十三年十月十一日のことだった。また山根は、後に北里柴三郎が結核専門病院土筆ヶ丘養生園を開設した時、診療面で大いに助力している。同期の大谷周庵の息子彬亮は、北里研究所付属病院院長として活躍した。また鶴崎平三郎は、神戸須磨に日本最初の海浜結核サナトリウムとしての須磨浦療病院を明治二十二年（一八八九）に開設している。（ややこしいが、俳人正岡子規は、須磨保養院に入院し、須磨浦療病院で診察してもらっていた。また、日本最初の海浜結核療養所、あるいはサナトリウムということになると、この少し前の明治鎌倉海浜院を嚆矢とする。しかし、この海浜院は短命で、その後の活躍ぶりを考えると、須磨浦療病院を最初の実質的な海浜サナトリウムとすることに異論はないだろう。）

北里は、明治十六年の春先に東京大学を卒業し、無事医学士となった。

思うところあって北里は、地方の医科学校校長や県立病院長のいかにもうまみのある話を聞き流しながら、将来を案じていた。当時、東京大学医学部を出てすぐに地方へ赴任する同級生は、たいてい150―250円の高給をもって迎えられていた。まだ全国に医学士少なく、引く手あまただったということである。

北里の心にあったのは、社会の福利ということであり衛生ということである。彼の思うところでは、いかなる学問も社会に裨益するところがなければ価値がないということであった。彼の生涯の口癖は、「学術を研究してこれを実地に応用し、それによって国民の衛生状態を向上せしめる」ということであった。

北里は、明治十七年（一八八四）九月八日に内務省御用掛申付（判任待遇）となってそこにできたばかりの衛生局に入局することを希望した。当時衛生局は、局長に長與専齋がおり、その下に永井久一郎書記官（永井荷風の父で、後の横浜正金銀行頭取である）、また御用掛の他に後藤新平準御用掛がいた。後藤は幕府の逆賊高野長英の親戚で、岩手県に生まれ、働きながら福島の医学校に学んだ。明治十三年（一八八〇）愛知県立病院院長兼愛知医学校長となっていた。一八八二年、板垣退助が岐阜で刺され、これを治療したことが政治家へ転ずる転機となりまた動機となったと言つて



もよい。まさに北里が内務省に入る同じ年の四月に後藤は内務省に赴任してきたばかりだった。

運悪く、後藤は学士でないのに、準御用掛であり、また俸給という点で、北里が七十円であるのに、後藤は八十円を貰っていた。それが負けず嫌いの北里には癪の種だった。そこで俸給の多少を云々する訳ではなかったが、一応釘を挿しておくために、不服を申し立てて筋を通したことであった。

内務省に入ると、すぐにヨーロッパ各国における医事衛生制度および医学関係の諸統計の処理と取り調べを命ぜられ、その整理と意見付置が任務であり、その報告に尽力した。このことは、単に語学力を必要としただけではなく、また同時に世界への目を養ったはずである。その時にこそ、マンسفエルトの個人指導が活き、ヨーロッパへの徳憑をしてやまなかった師の恩義がしみじみと感じられたはずである。

この後藤は、この入省時のちよつとしたごたごたを知ってか知らずか、後になつても北里を支持し支援し続けた。それは友情といつてもよかつたかも知れないが、彼の波瀾万丈の人生を考えるのと、二人の人生が交叉したこともまた、妙な出会いだったと言つてよいだろう。(この項、未完)

## 〔注〕

(一) 福田真人「北里柴三郎試論・問題の所在と初期の教育」、『言語文化論集』名古屋大学大学院国際言語文化研究科、第ⅩⅦ巻、第1号、一―十二頁、二〇〇四年。

(二) マンスフェルトは、オランダ海軍軍医で上海から来て、長崎で教えた。その後任期満了で帰国する所を、相次いで別の学校で教鞭を執つたのである。熊本医学校(明治四―七年)、京都府療病院(明治九年―十一年)、大阪病院(明治十一年―十二年)で教鞭を取り、滞日十四年の後にオランダ本国に帰国した。

(石橋長英、小川鼎三『お雇い外国人…医学』六五―六六頁。)

後年ドイツ留学中の北里は、師マンسفエルトを訪れ、懐かしい再会を果たしている。その際、師のマンسفエルトは北里と共に多かつた多くの場所を訪問して、自慢をしたかつたらしい。北里は、いわば出藍の誉れであった。

(三) 宮島幹之助『北里柴三郎伝』一七頁。

(四) 北里一郎『北里柴三郎の人と学説』一三頁。

(五) 宮島幹之助、前掲書、一三三頁。

(六) 川俣昭男『明治初期東京大学医学生川俣四男也…その学生生活を中心に』、『東京大学史紀要』第二三号、二〇〇五年三月。

(七) 安政五年(一八五八)はまた、福沢諭吉が江戸築地鉄砲洲の中津藩屋敷の中で蘭学塾を開いた年でもある。後にこれが福沢の慶応義塾へと発展していくのである。築地は外国人が住んで商売をしたり、また宣教師が学校を築いたりした場所である。この地では、青山学院、明治学院の基礎が築かれた。また、この地に一時外国人を目標にした新島原という政府公認の遊廓が造られたが、実入りが少なくて間もなく

閉鎖された。東京都『築地居留地』(歴史紀要四) 二二二―二二八頁。

(八) 川俣昭男、前掲論文、九頁。

(九) 『東京大学百年史』四〇三頁。

(一〇) 河本重次郎『回顧録』七一―七二頁。

(一一) 同前、七四―七五頁。

(一二) 宮島幹之助、前掲書、二二五頁。

(一三) 北里記念室『生誕一五〇年・北里柴三郎』、二二頁。

(一四) 河本重次郎、前掲書、八〇頁。

〔北里柴三郎文献表〕

〔書籍・邦文〕

石黒忠憲『懐旧九十年』岩波書店、一九八三年。

石橋長英、小川鼎三『お雇い外国人』九、医学、鹿島出版会、一九七九年。

伊藤真次・佐野豊『日本医学のパイオニア』2巻、丸善、二〇〇三年、247p。

伊藤智義・森田信吾『栄光なき天才たち』第四巻、集英社、一九九七年。

鶴崎熊吉『青山胤通』青山内科同窓会、一九三〇年。

鹿子木敏範(かのこぎ・としのり)『北里柴三郎回顧』肥後医育記念館、一九七八年。

鹿子木敏範『熊本における医学教育の変遷―古城医学校から熊本医科大学まで―』肥後医育記念館、一九八五年。

鹿子木敏範『鹿子木敏範著作集・落葉集』医療法人桜ヶ丘病院、一九九九年。

鹿子木敏範・松村勝之・宮崎美代子『肥後医育史年表』肥後医育記念館、

一九七六年。

秀迷廬(かむろ・めいろ)『小国郷史』熊本県小国町・河津泰雄、一九六五年。

河本重次郎『回顧録』東京帝国大学医学部眼科教室、河本先生喜寿祝賀会、昭和11年。

北 篤『正伝野口英世』毎日新聞、二〇〇三年。

北里一郎『北里柴三郎の人と学説』北里一郎、一九九七年。

北里学園編『北里柴三郎記念館』北里学園、一九八七年。

北里記念室『生誕一五〇周年記念 北里柴三郎』北里研究所、二〇〇三年。

北里研究所編『北里研究所五十年誌』北里研究所、一九六六年。

北里研究所編『北里研究所七十五年誌』北里研究所、一九九二年。

北里柴三郎『傳染病研究講義』南江堂、明治二九年(一八六二)。

北里柴三郎論説編集委員会編『北里柴三郎論説集』北里研究所、一九七八年。

熊谷謙二『思い出の青山胤通先生』青山先生生誕百年祭準備委員会、一九五九年。

熊本県立第一高等学校『隈本古城史』熊本県立第一高等学校、一九八四年。

小高健『伝染病研究所』学会出版センター、一九九三年。

志賀潔『或る細菌学者の回想』雪華社、一九六六年。

篠田達明『闘う医魂』小説・北里柴三郎』文藝春秋、一九九四年。

砂川幸雄『森村市左衛門の無欲の生涯』草思社、一九九八年。

砂川幸雄『第一ノールベル賞候補／北里柴三郎の生涯』NTT出版、二〇〇三年。

高野六郎『北里柴三郎』(現代伝記全集3) 日本書房、一九六五年。

竹内 均『難病に取り組み医学を発展させた人たち…ヒポクラテス、パスツール、北里柴三郎』ニュートンプレス、二〇〇三年。

東京大学医学部百年史編纂委員会編『東京大学医学部百年史』東京大学出版会、一九六七年。

長木大三『北里柴三郎』慶応通信、

長木大三『北里柴三郎とその一門』慶応通信、一九八九年。

長崎大学医学部編『長崎医学百年史』長崎大学医学部、一九六七年。

中村桂子『北里柴三郎論・破傷風菌論』哲学書房、一九九九年。

中浜明編『中浜東一郎日記』富山房、一九九二―一九九五年。

野村 茂『北里柴三郎と緒方正規』日本近代医学の黎明期』熊日出版、

二〇〇三年。

長谷川つとむ『東京帝大医学部総理・池田謙齋伝』新人物往来社、一九

八九年。

秦佐八郎『秦佐八郎論説集』北里研究所、

福沢諭吉『福沢諭吉全集』岩波書店、

藤野恒三郎『藤野・日本細菌学史』近代出版、一九八四年。

宮島幹之助／高野六郎『北里柴三郎伝』北里研究所、一九三二年、一九

八七年復刻、321 + 13 + 24 p。

森村市左衛門『困之礎』私家版、明治39年（一九〇六）。

山崎光夫『ドンネルの男』北里柴三郎』2巻、東洋経済新報社、二〇〇三年。

吉見蒲州（和子）『紳士と藝者』啓業館書店、明治45（一九一二）年。

若山三郎『人類をすくったカミナリおやじ』信念と努力の人生・北里

柴三郎』P H P、一九九二年。

Kitasato Institute and Kitasato University, Collected Papers fo Shibasaburo

Kitasato, Kitasato Institute, 1977.

———, Collected Papers of Sahachiro Hata, Kitasato Institute, 19\*\*.

Willis, Christopher, Plagues: Their Origin, History and Future, Harper

Collins Publishers, 1996.

『雑誌論文・記事』

緒方規雄「北里、緒方両先生」、『日本医事新報』日本医事新報社、第1  
415号、一九五一年。

小関恒雄「明治初期東京大学医学部卒業生動静一覽」（一）、（二）、『日本  
医史学雑誌』、第33巻、第3号、三二七―三三七頁、一九八七年、およ

び第36巻、第3号、二二九―二四七頁、一九九〇年。

鹿子木敏範「熊本における医学教育の回顧…再春館創設から官立熊本医

科大学発足まで」、『熊杏』（母校創設八五周年記念特集号）熊本大学医

学部同窓会、一九八一年。

川俣昭男「明治初期東京大学医学部医学生川俣四男也とその学生生活を

中心に」、『東京大学史』第23号、二〇〇五年三月。

北里善三郎「父北里柴三郎―記憶の泉から」、『三田評論』慶応義塾大学

出版会、8―9合併号、一九七一年。

田口文章、合田恵「北里柴三郎の明治25年」、『日本医事新報』日本医

事新報社、第3777―9号、一九七一年。

山崎光夫「シャロロックホームズの日の丸」、『オール読物』第52巻6号、

三五六―三八二頁、一九九七年。